

2008. 02. 26（火）

ベック兄メッセージ（メモ）

引用聖句

マタイの福音書 24章3節から14節

イエスがオリーブ山ですわっておられると、弟子たちが、ひそかにみもとに来て言った。「お話してください。いつ、そのようなことが起こるのでしょうか。あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしょうか。」そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「人に惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名のる者が大ぜい現われ、『私こそキリストだ。』と言って、多くの人を惑わすでしょう。また、戦争のことや、戦争のうわさを聞くでしょうが、気をつけて、あわてないようにしなさい。これらは必ず起こることです。しかし、終わりが来たわけではありません。民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々にききんと地震が起こります。しかし、そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです。そのとき、人々は、あなたがたを苦しいめに会わせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。また、そのときは、人々がだれいつまづき、互いに裏切り、憎み合います。また、にせ預言者が多く起こって、多くの人々を惑わします。不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなります。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから、終わりの日が来ます。」

27節

「人の子の来るのは、いなくが東から出て、西にひらめくように、ちょうどそのように来るのです。」

30節から32節

「そのとき、人の子のしるしが天に現われます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見ます。人の子は大きなラッパの響きとともに、御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで、四方からその選びの民を集めます。いちじくの木から、たとえを学びなさい。枝が柔らかくなって、葉が出てくると、夏の近いことがわかります。」

36節

「ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも

子も知りません。ただ父だけが知っておられます。」

4 2 節から 4 7 節

「だから、目を覚ましていなさい。あなたがたは、自分の主がいつ来られるか、知らないからです。しかし、このことは知っておきなさい。家の主人は、どろぼうが夜の何時に来ると知っていたら、目を見張っていたでしょうし、また、おめおめと自分の家に押し入れはしなかったでしょう。だから、あなたがたも用心していなさい。なぜなら、人の子は、思いがけない時に来るのですから。主人から、その家のしもべたちを任されて、食事時には彼らに食事をきちんと与えるような忠実な思慮深いしもべとは、いったいどれでしょうか。主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見られるしもべは幸いです。まことに、あなたがたに告げます。その主人は彼に自分の全財産を任せるようになります。」

今日は、テサロニケ第一の手紙 4 章の前半について一緒に考えたいと思います。テーマとして、『イエス様のご再臨に対する教会の備え』とつけることができますと思います。

イエス様ご自身の目に見える形でのご再臨は、ちょうど復活また昇天の場合と全く同じように、はっきりと聖書に示されています。使徒行伝の 1 章 1 1 節に次のように書かれています。

使徒の働き 1 章 1 1 節

そして、こう言った。「ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。」

見えない世界から急に現われた天の御使いが、十二人の弟子たちに言われたのです。

イエス様のご再臨は、二つの場面に分けて考えることができます。

- ・まず第一に、イエス様に属する者たちのために、イエス様は空中まで降りて来られます。
- ・その次に、イエス様に属する者たちとともに、地上まで降りて来られるのです。

救われた人々の信仰は、すでに成就された救いのみわざに基づいていること。他方私たちの希望は、イエス様ご自身が再びお出でになることによって行なわれる、救いの完成にあるのです。

三つの質問について一緒に考えたいと思います。

第一番目。イエス様は本当に再び来られるのか。

第二番目。いつイエス様は来られるのか。

第三番目。何のためにイエス様は来られるのか。

*第一の質問、イエス様は再び来られるのでしょうか。

この問いは、こんにちいわゆる現代の神学によって否定されています。しかし、大切なことは、人間がどのように考えるかということではなく、聖書が何と言っているかということです。

旧約聖書の預言者たちは、すべて約束された救い主、メサイアの生誕、受難と最後の死だけではなく、ご再臨の約束をもはっきりと預言しています。ダニエル書7章を読むと、次のように書かれています。

ダニエル書 7章13節

私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。

と記されています。

旧約聖書全体は、二つの意味において、主のご来臨を預言しているのです。

まず第一に、「小羊として」低くなられたかたちでこの世に来られ、

第二に、王として「栄光をもって」現われる、ということです。

新約聖書においては、どの章を見ても主のご再臨が記されています。新約聖書全体は260章ありますが、その中に318回イエス様のご再臨について記されています。イエス様ご自身が「ご再臨」についてはっきり語られました。よく知られている箇所です。

ヨハネの福音書 14章2節、3節

「わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。」

もちろんここで「あなたがた」と記されているのは、主を信じ、主を受け入れた者たちを意味します。いわゆる「空中再臨」です。今読んでいただきましたマタイ伝の24章をもう一度読みます。

マタイの福音書 24章27節

「人の子の来るのは、いなくまが東から出て、西にひらめくように、ちょうどそのように来るのです。」

30節

「そのとき、人の子のしるしが天に現われます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見ます。」

これはイエス様の公のご再臨を示すことばです。黙示録の中でよく出てくることばは、

「わたしはすぐに来る。あなたの冠を誰にも奪われないように、あなたの持っているものをしっかりと持っていなさい」と。或いは、「見よ。わたしはすぐに来る」。

しかし、イエス様ご自身だけでなく、天の御使いたちもイエス様のご再臨についてはっきり告げ知らせたのです。

使徒の働き 1章11節

「なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。」

「このイエス」、すなわち同じイエス様がまたおいでになります、と。

これは、目に見えるかたちで現われるご再臨です。ユダヤ人に語られた「約束」です。

使徒たちもすべてイエス様のご再臨についてはっきり語ったのです。

ピリピ人への手紙 3章20節

私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。

そして先週も一緒に学びましたが、

テサロニケ人への手紙・第一 4章16節、17節

主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

初代教会の証しは、このようなものでした。「私たちは、いつまでも主とともにいる」。イエス様が再び来られるということこそ、この地上におけるあらゆる問題に対するただ一つの解答です。

ある子どもが、母親に向かってこう言いました。「イエス様が早く来ないと困っちゃう」。私たちが毎日そう思うべきではないでしょうか。「イエス様が早く来ないと困っちゃう」と。私たちがどうしたらいいか全くわからないことがあった時も、しかしイエス様は「必ず来る」と約束してくださいました。

イエス様が再臨なさるということこそ私たちの望みであり喜びです。イエス様のご再臨を考えない者、或いは確信していない者には本当の喜びと希望がなく、また人生の支えもないのです。イエス様が再び来られるということは、全く疑う余地のない確かな事実です。

*第二番目の質問。いつイエス様は来られるのでしょうか。

前に読んでいただきましたマタイ伝 24章36節には、次のように書かれています。

マタイの福音書 24章36節

「ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。」

何世紀もの間、いろいろな人々がイエス様のご再臨の日、ご再臨の時を計算しようと努力しましたが、その結果はすべてが間違っていました。この吉祥寺集会にも、二、三人の人がやって来て、イエス様が再臨なさる時を予言しました。来年の九月何日というように、その人たちは断言したのです。それからもう二十年経ちました。イエス様はまだ再臨なさいません。聖書は、「計算してはいけない」、「知る必要はない」とはっきり語っています。毎日ご再臨を待ち望めばそれで十分です。なぜならこれこそ、喜びと力、希望の源であるからです。

聖書の中には非常に大切な出来事、すなわちイエス様のご再臨のことが記されており、このことは誰も知らなければなりません。いつになるのでしょうか。

五つのことが言えると思います。

・まず第一に、「そのしるしが自然現象の中に見られるようになる」と書かれています。

マタイの福音書 24章7節

「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々にききんと地震が起こります。」

歴史上こんにちほど多く、飢饉や地震が起こっている時代はありません。このような自然現象の出来事は、私たちに、「主のご再臨を忘れないように」との戒めを意味しているのです。

・二番目。国民と国民との間にも変化が起こるのです。

マタイの福音書 24章6節、7節

「また、戦争のことや、戦争のうわさを聞くでしょうが、気をつけて、あわてないようにしなさい。これらは必ず起こることです。……。民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々にききんと地震が起こります。」

と書かれています。特にイスラエルをめぐる中近東における動乱は、やがてイエス様が再臨なさることを暗黙のうちに語っています。ですからアラビアの国々は、ユダヤ人を一人残らずみんな殺そうと思っているのです。もしそうだとすればイエス様は来られません。(無理なのです。)

・三番目。宗教生活の中にも、一つの大きな変化を見ることができます。

多くの教会で、こんにちほど聖書批判が起きたり、聖書のみことばに対し反対しようとする妨げが行なわれている時代はありません。そして、至るところで「妥協による一致」が試みられていますが、それが「悪魔の働きによるもの」であるという事実を正しく認識している人は少ないのです。また至るところで無関心、無知、怠惰などの信仰の墮落も見られます。

マタイの福音書 24章12節、13節

「不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなります。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。」

至るところで、「私こそキリストだ」という偽預言者が現われることも、「終りの世」のしるしです。

・四番目。マタイ伝24章14節を読むと、そこに宣教のことが記されています。

マタイの福音書 24章14節

「この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから、終わりの日が来ます。」

ここでは、「すべての民に対してあかしをするために全世界に宣べ伝えられる」と書かれています。すなわち、すべての民がキリスト者になるということではなく、「あかしが全世界に宣べ伝えられる」と聖書は語っています。こんにち聖書は、千種類以上の言語に翻訳されています。「福音の宣教」だけを考えると、イエス様は今日来られるかもしれない、と言えるのです。

・その中でも特に大切なしるしは、五番目になります。イスラエルの民です。

イスラエルの民が自分たちの国を持ち、その地へと帰って来る時、主のご再臨は近いと聖書は語っています。イスラエルは、千年間自分の国を持っていませんでした。悲劇そのものです。もちろん、主のおことばに対して聞く耳をもたないとそのようになる、と預言者たちは何百年も前から預言していたのです。マタイ伝24章31節からもう一度見てみましょう。

マタイの福音書 24章31節から33節

「人の子は大きなラッパの響きとともに、御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで、四方からその選びの民を集めます。いちじくの木から、たとえを学びなさい。枝が柔らかくなって、葉が出てくると、夏の近いことがわかります。そのように、これらのことのすべてを見たら、あなたがたは、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。」

イスラエルが1948年に建国されたことは、私たち人間には考えられなかったことで

す。それは奇跡そのものでした。もちろんイスラエルに帰る人々は、それぞれ生まれ育った国の言葉でしか話せなかったのです。しかし今イスラエルでは、みなヘブライ語で話すようになったことも、考えられない奇跡です。

前に述べましたように、イエス様のご再臨は二つの場面に分けて考えることができます。

- ・第一に、目に見えないかたちで。
- ・第二に、目に見えるかたちで。

換言すれば、一方においてイエス様は「盗人のように来られ」、他方において「稲妻のように来られる」と聖書は語っています。

マタイの福音書 24章42節から44節

「だから、目を覚ましていなさい。あなたがたは、自分の主がいつ来られるか、知らないからです。しかし、このことは知っておきなさい。家の主人は、どろぼうが夜の何時に来ると知っていたら、目を見張っていたでしょうし、また、おめおめと自分の家に押し入れられはしなかったでしょう。だから、あなたがたも用心していなさい。なぜなら、人の子は、思いがけない時に来るのですから。」

パウロは、テサロニケ第一の手紙の中で、書いているのです。

テサロニケ人への手紙・第一 5章2節

主の日が夜中の盗人のように来るということは、あなたがた自身がよく承知しているからです。

ペテロも、同じようなことを書いたのです。

ペテロの手紙・第二 3章10節

しかし、主の日は、盗人のようにやって来ます。その日には、天は大きな響きをたてて消え失せ、天の万象は焼けてくずれ去り、地と地のいろいろなわざは焼き尽くされます。

と記されています。

黙示録の中でも、「盗人」という表現が出てきます。

ヨハネの黙示録 3章3節

「だから、あなたがどのように受け、また聞いたのかを思い出しなさい。それを堅く守り、また悔い改めなさい。もし、目をさまさなければ、わたしは盗人のように来る。あなたには、わたしがいつあなたのところに来るか、決してわからない。」

イエス様はすべての人のために来られるのではなく、「信じる者のために来られる」と、今まで述べた聖句は記しています。

ルカ伝 1 7 章 3 4、3 5 節を読むと、「やはり信じる者に語られたことば」です。

ルカの福音書 1 7 章 3 4 節、3 5 節

「あなたがたに言いますが、その夜、同じ寝台で男がふたり寝ていると、ひとりを取られ、他のひとは残されます。女がふたり一緒に白をひいていると、ひとりを取られ、他のひとは残されます。」

と書かれています。イエス様は、「盗人のように」だけでなく、「稲妻のように」、つまり「すべての人にわかるかたち」でお出でになるのです。そしてそのとき主イエス様は、「救い主」としてではなく、「さばき主」としてお出でになります。稲妻のようにという意味は、「悪を裁き滅ぼすために」という意味です。

例えば、黙示録 1 章 7 節にも次のように書かれています。

ヨハネの黙示録 1 章 7 節

見よ、彼が、雲に乗って来られる。すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。地上の諸族はみな、彼のゆえに嘆く。しかり。アーメン。

と。そのときイエス様は、「低いかたち」をとられず、「大いなる栄光のうちに」現われるのです。

パウロもテサロニケにいる人々に同じようなことを書きました。

テサロニケ人への手紙・第二 1 章 1 0 節

その日に、主イエスは来られて、ご自分の聖徒たちによって栄光を受け、信じたすべての者の一そうです。あなたがたに対する私たちの証言は、信じられたのです。一感嘆の的となられます。

前に読みましたマタイ伝 2 4 章 3 0 節も、同じ内容のことばです。

マタイの福音書 2 4 章 3 0 節

「そのとき、人の子のしるしが天に現われます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見ます。」

*最後の三番目の質問。何のためにイエス様は来られるのでしょうか。

最初にこの世に来られたイエス様のご目的は、「失われた人を捜し求めるため」でした。「わたしは失われた人を捜して救うために来た」とイエス様はおっしゃいました。「わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来た」。「わたしが来たのは仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また多くの人のための贖いの代価として自分のいのちを与えるためである」とイエス様ははっきり語られたのです。「わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです」と。イエス様は、「身代わりとなって死

ぬために、救いの代価を払うために」来られたのです。

しかし二度目に来られる時のイエス様のご目的は、全く違います。何のためにイエス様は来られるのでしょうか。

・まず第一番目。イエス様は「第一の復活のために」来られる、と聖書は記しています。

聖書によるとすべての人はよみがえります。（信仰があってもなくても。）けれど、まず第一に主の恵みによって救われた人々がよみがえるのです。前に読みました箇所を見ても、そのように書かれています。

テサロニケ人への手紙・第一 4章16節、17節

主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

先に召された人々は後でも先です。私たちはみな追い越されてしまいました。まず彼らが先に引き上げられます。

しかし残りの死者たち、つまり生きている間に意識してイエス様を拒んだ人々は、千年王国の後でよみがえるのです。黙示録の20章を読むと、次のように書かれています。

ヨハネの黙示録 20章4節後半、5節

彼らは生き返って、キリストとともに、千年の間王となった。そのほかの死者は、千年の終わるまでは、生き返らなかった。

このようにイエス様のご再臨は、まず第一に、第一の復活のためであることが明らかです。

・次に第二番目。またこの地上に生きている信者たちが変えられるために、来られます。

テサロニケ人への手紙・第一 4章17節

次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

同じ事実について、コリント第一の手紙にも書かれています。

コリント人への手紙・第一 15章51節、52節

聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

みなイエス様と同じ姿に変えられるのです。パウロはコリントにいる兄弟姉妹にも同じようなことを書きました。

コリント人への手紙・第二 5章4節

確かにこの幕屋にいる間は、私たちは重荷を負って、うめいています。それは、この幕屋を脱ぎたいと思うからでなく、かえって天からの住まいを着たいからです。そのことによって、死ぬべきものがいのちにのまれてしまうためにです。

すなわちイエス様のご再臨の時、一瞬にして卑しい肉のからだに栄光のからだに、復活のからだに変えられるのです。そのとき私たちはあらゆる悩み、苦しみ、争いから引き上げられて栄光へと移されるのです。そしてイエス様のみそばにいることを許されるのです。その時私たちは、イエス様を拝することができ、イエス様に似たものとされる、と聖書ははっきり語っているのです。

・一番大切なことは、第三番目になりますが、ご再臨の後に来る小羊の婚姻ではないでしょうか。

ヨハネの黙示録 19章7節

私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。小羊の婚姻の時に来て、花嫁はその用意ができたのだから。

9節

御使いは私に、「小羊の婚宴に招かれたものは幸いだ、と書きなさい。」と言い、また、「これは神の真実のことばです。」と言った。

このように目に見えないかたちでこの世に来られた後、イエス様は公に目に見えるかたちで再臨なさるのです。

・しかもそのときイエス様は、四番目になりますが、偽預言者と反キリストを裁く「さばき主」として来られるのです。テサロニケ人への第二の手紙2章8節を読むと、次のように書かれています。

テサロニケ人への手紙・第二 2章8節

その時になると、不法の人が現われますが、主は御口の息をもって彼を殺し、来臨の輝きをもって滅ぼしてしまわれます。

「不法の人」とは、いわゆる反キリストです。

テサロニケ第二の手紙2章8節に書かれている非キリスト、また偽預言者の全体像は、黙示録13章、あるいはテサロニケ第二の手紙2章の中でくわしく描写されています。

・第五番目。しかし、イエス様は、非キリストまた偽預言者を裁くさばき主としてだけでなく、「ご自分の平和の国を築くため」にも来られます。そのとき、地上における平和の国は現実のものとなるのです。それ以前のあらゆる平和運動の試みはすべて挫折し、失敗してしまうのです。この平和の国については、すでに旧約聖書の中で言及されています。おもにイザヤ書を読むとわかります。ユダヤ人にとって、イザヤ書は福音そのものです。二、三箇所読んでみましょう。

イザヤ書 35章1節、2節後半

荒野と砂漠は楽しみ、荒地は喜び、サフランのように花を咲かせる。盛んに花を咲かせ、喜び喜んで歌う。

その前の

イザヤ書 32章1節から4節

見よ。ひとりの王が正義によって治め、首長たちは広義によってつかさどる。彼らはみな、風を避ける避け所、あらしを避ける隠れ場のようになり、砂漠にある水の流れ、かわききった地にある大きな岩の陰のようになる。見る者は目を堅く閉ざさず、聞く者は耳を傾ける。気短な者の心も知識を悟り、どもりの舌も、はっきりと早口で語るができる。

そして

イザヤ書 35章5節、6節

そのとき、盲人の目は開かれ、耳しいた者の耳はあけられる。そのとき、足なえは鹿のようにとびはね、おしの舌は喜び歌う。荒野に水がわき出し、荒地に川が流れるからだ。

或いは

イザヤ書 65章20節から23節

そこにはもう、数日しか生きない乳飲み子も、寿命の満ちない老人もない。百歳で死ぬ者は若かったとされ、百歳にならないで死ぬ者は、のろわれた者とされる。彼らは家を建てて住み、ぶどう畑を作ってその実を食べる。彼らが建てて他人が住むことはなく、彼らが植えて他人が食べることはない。わたしの民の寿命は、木の寿命に等しく、わたしの選んだ者は、自分の手で作った物を存分に用いることができるからだ。彼らはむだに労することもなく、子を産んで、突然その子が死ぬこともない。彼らは主に祝福された者のすえであり、その子孫たちは彼らとともにいるからだ。

と書かれています。

もう一箇所、11章に戻りまして、

イザヤ書 11章4節から10節

正義をもって寄るべのない者をさばき、公正をもって国の貧しい者のために判決を下し、口のむちで国を打ち、くちびるの息で悪者を殺す。正義はその腰の帯となり、真実はその胸の帯となる。狼は子羊とともに宿り、ひょうは子やぎとともに伏し、子羊、若獅子、肥えた家畜がともにいて、小さい子どもがこれを追っていく。雌牛と熊とは共に草を食べ、その子らは共に伏し、獅子も牛のようにわらを食う。乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れした子はまむしの子に手を伸べる。わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、そこなわない。主を知ることが、海をおおう水のように、地を満たすからである。その日、エッサイの根は、国々の民の旗として立ち、国々は彼を求め、彼のいこう所は栄光に輝く。

と記されています。これは全部、平和の国がどのようなものであるかについての箇所です。

・第6番目。更にイエス様は、単にこの目的のためだけではなく、「悪魔を裁くため」にも来られます。

また黙示録に戻りまして、

ヨハネの黙示録 20章1節から3節

また私は、御使いが底知れぬ所のかぎと大きな鎖とを手に持って、天から下って来るのを見た。彼は、悪魔でありサタンである竜、あの古い蛇を捕え、これを千年の間縛って、底知れぬ所に投げ込んで、そこを閉じ、その上に封印して、千年の終わるまでは、それが諸国の民を惑わすことのないようにした。サタンは、そのあとでしばらくの間、解き放されなければならない。

また、

ヨハネの黙示録 12章10節

そのとき私は、天で大きな声がこう言うのを聞いた。「今や、私たちの神の救いと力と国と、また、神のキリストの権威が現われた。私たちの兄弟たちの告発者、日夜彼らを私たちの神の御前で訴えている者が投げ落とされたからである。」

そのときこのみことばは成就されるのです。

・第7番目。イエス様のご再臨の目的は、最後の審判のための第二の復活です。

ヨハネの黙示録 20章12節、13節

また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところに従って、自分の行ないに応じてさばかれた。海はその中にいる死者を出し、死もハデスも、そ

の中にいる死者を出した。そして人々はおのおの自分の行ないに応じてさばかれた。

と記されています。

イエス様も、このことについて、次のように語られたことがあります。

ヨハネの福音書 5章28節、29節

「このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞いて出てくる時が来ます。善を行なった者は、よみがえっていのちを受け、悪を行なった者は、よみがえってさばきを受けるのです。」

またマタイ伝25章の中で、イエス様は同じ事実について次のようにおっしゃいました。

マタイの福音書 25章31節、32節

「人の子が、その栄光を帯びて、すべての御使いたちを伴って来るとき、人の子はその栄光の位に着きます。そして、すべての国々の民が、その御前に集められます。彼は、羊飼いが羊と山羊とを分けるように、彼らをより分け、」

と記されています。その時数々の書物が開かれ、言葉や考えや行ないによって犯した罪が裁かれるのです。けれど、いのちの書に自分の名前を書きしるされた者は幸いです。私たちの罪はすべてイエス様の血によって赦されているという確信こそ、永遠の喜びの源です。そして、いのちの書に記されていない人々に対して、イエス様は次のようにおっしゃいました。

マタイの福音書 25章41節

「それから、王はまた、その左にいる者たちに言います。『のろわれた者ども。わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火に入れ。』」

地獄に行く人々、永遠の火に入る人々は、とんでもない罪を犯したからではありません。

「悔い改めたくなかったので、提供された救いを受け入れようとしなかった」ことのためにです。天国へ行きたい人は行きます。なぜなら、「求めよ。そうすれば与えられる」と、約束されているからです。

・第8番目。イエス様が再臨なさる最後のご目的は、「新しい天と新しい地」をお建てになることです。

ヨハネの黙示録 21章1節前半

また私は、新しい天と新しい地とを見た。

と書かれています。

ペテロの手紙・第二 3章10節

しかし、主の日は、盗人のようにやって来ます。その日には、天は大きな響きをた

てて消えうせ、天の万象は焼けてくずれ去り、地と地のいろいろなわざは焼き尽くされます。

と記されています。

そして黙示録の 21 章 4 節、5 節は、本当にすばらしい箇所です。葬儀のとき引用される箇所です。

ヨハネの黙示録 21 章 4 節、5 節

「彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」すると、御座に着いておられる方が言われた。「見よ。わたしは、すべてを新しくする。」また言われた。「書きしるせ。これらのことばは、信ずべきものであり、真実である。」

最後に、私たちがどのようにしてイエス様のご再臨を待ち望むべきでしょうか。心からイエス様を待ち望む者として、すなわち本当にそのための備えができている者として、私たちは信仰を全うすべきです。

もう一箇所読みます。

ルカの福音書 12 章 36 節、37 節前半

「主人が婚礼から帰って来て戸をたたいたら、すぐに戸をあけようと、その帰りを待ち受けている人たちのようでありなさい。帰って来た主人に、目をさましているところを見られるしもべたちは幸いです。」

「待っていないさい」、「用意をしていないさい」というみことばは、主のご命令です。このみことばに従順でないことは、罪です。

イエス様は今日来られるかどうか、問題なのではありません。私たちが心からイエス様を待ち望んでいるかどうか、問題です。そのような心構えで今日も主を待ち望んでいないとすれば、それは本当に主のしもべとして不忠実、不従順です。

このように「生き生きとした待ち望みの信仰」を持っていない者は、実際は盲目であり、暗やみの中を手探りで這い回るようなものです。

初代教会の人々は確かに私たちよりも苦しみました。無視されてしまったのです。けれど、彼らは魅力的でした。悩みながら、苦しみながら、大いに喜ぶことができたのです。どうしてかといいますと、「イエス様は来られる」と確信したからです。

了